Bulletin of Toyohashi Junior College
1990, No. 7, 35-44

初期トルコ語仏典の年代に関する課題

——『マイトレヤとの邂逅』の場合——

小　田　壽　典

[Juten Oda: On the Historical Problem of Early Turkish Busddhist Texts —In the Case of Maitrisimit nom bitig––]

はしがき

古ウイグル‐トルコ語仏教文献がどのような歴史的舞台に登場したかは，トルコ語文献学や仏教文化史の問題であるだけでなく，文化受容（または伝播）と民族的同化とも関連する興味深い問題である．とくに初期の仏典については，最近，ラウト（J. P. Laut 1986）の『初期トルコ語仏教とその文献』と森安孝夫（1989）の「トルコ仏教の源流とトルコ語仏典の出現」が発表され注目に値する．いかなる歴史的背景のもとに，どんな文化史的枠組みにおいて，初期トルコ語仏典が出現したか，について関説する．

初期仏教文献と目された写本は，より古層の言語性質を持つことが指摘されてきた．西北中国のシルクロードへの門戸であった敦煌の莫高窟第17窟（いわゆる蔵経洞）からもたらされたトルコ語文献にも，同様な言語痕跡を残す写本が知られる．この蔵経洞の閉鎖時期（11世紀前半）からみて，時代認定の上限は９，10世紀あたりに置かれる（cf. Hamilton 1986）．

とりわけ，初期トルコ語仏典の年代的課題は，テキストの外観，文字と言語，訳経，写経，宗教思想などに関する諸事項の文化史的位置付けから総合的に帰納されるもので，包括的結論が要求される．

ここでは，『マイトレヤとの邂逅』教本（Maitrisimit nom bitig）について，これまでに研究された事項について略述し，課題の要点を考えたい．

1．写本の発見と刊行及び外観

1．1．　写本の発見と刊行

（a）　ベルリン所蔵本

ドイツ探検隊のルコック（A. v. Le Coq）はトルファン盆地のセンギム北方の渓谷に横たわる洞窟廃寺（ルコックは８世紀から11世紀に日付した）から多くの写本をベルリンへもたらした．そのうち，600点に及ぶ断簡（出土記号 T II S2, 1 〜600 : Gabain 1961: Beiheft II , p.87-90）がこの経典に比定された．整理の結果，それは原本の10％に過ぎない大部の作品であった．ガバイン女史は２葉を別筆写本（第２，６写本）としたほかは，同一本（24cm ×57.4cm: Beiheft II, p. 25）とみて，センギム大写本と名付けた．ほかにムルトゥク出土の写本３種（第３，４，５写本）を含めて６類にわけられた．

テキストの刊行は，ガバイン女史によって，まずマインツ・アカデミー保管の113葉がファクシミルで出版され（1957），ついでベルリン（東）・アカデミー所蔵の114葉もファクシミル刊行された（1961）．以下注記しない情報は，その付録解説書（Beiheft [I], 1957; II, 1961）による．第二次大戦のために紛失した原葉の，ルコックによる音訳とミュラー（F. W. K. Müller）のドイツ語訳注が加えられ，その後の破損や分離を補うルコックの音訳も載せられた（Beiheft II, pp.42-85）．シナシ・テキン（Şinasi Tekin 1980）の音写・ドイツ語訳注・索引は，ファクシミル刊本226葉（Taf. 98 削除）に基づいた．ガバイン女史が別筆とみた１葉（Taf. 227: 第６写本）を

テキンは大写本の「地獄の章」（第２０章～第２７章）（テキンはこれら章を別本に扱う）に入れ，またムルトゥク３写本を２類にまとめたが，後者についてラウトは同一本の可能性を指摘した（Laut 1986, pp. 46-48）．断片の再構成はたいへん困難な作業であるに違いない（cf. Laut 1986, pp. 17-45）．

（ｂ）ウルムチ博物館所蔵本

ハミ写本は，1959 年春に哈密県の脱米爾底（Demirti）地方の仏教廃寺 から発見された（馮家昇 1962, p. 90）．馮家昇の報告では 608 葉と数えられたが，それは他の写本も含まれたようだ．現在ウルムチの新疆ウイグル自治区博物館所蔵の残葉は全 293 で，うち 114 葉が完全（44cm × 22cm）か完全に近い，と耿世民は述べる（1980, p. 101, p. 130, n. 2）．テキストの刊行は，最近（1988），前５章（序章と４章）がファクシミルと音訳を付し，イスラフェル（Israfer Yusuf: 伊斯拉菲爾・玉素甫）他によりウルムチから，別に耿世民（Geng Shimin）とクリムカイト（Hans-Joachim Klimkeit）によってドイツから行われた．前者は中国語訳と現代ウイグル語訳があり，後者はドイツ語訳注がある．これよりさき，李経緯（Li Jingwei）の研究（第２章：1982；第３章：1983），ドルクン（Dolukun Kamber: 多魯坤・膺白爾） 他による序章研究（1985）があり，耿世民の第２章研究（1980; 現代ウイグル語），また同氏のクリムカイト，ラウトとの共同研究（第 10 章：1987; 第 11 章：1988；第 16 章：1985）も発表された．

1. 2. 写本の外観

紙質：センギム写本（以下ことわりのないものはこの写本についてである）は多くのマニ教文献とは異なって表面につやがないが，とりわけざらざらでもない．巻子本の漢文写本よりも厚手で，おそらく比較的古い古典的紙漉きの技法に由来するとしてよいという．

ハミ写本は，褐黄色になった厚手紙で滑らかだがもろい（Geng 1980, p. 101; 1988, p. 5, Israfer 1988, p. 1）．

様式：いわゆる頁葉型紙本で，56 × 24cm ほど（57. 4 ×～2 4cm : 前述），文字面は 19. 05cm 幅，各面は 30 ～ 33 行，紐孔は６～８ 行のなかに直径 5. 5cm の円形をなすという．ハミ写本も同じく頁葉型紙本で，44 × 22（Geng ～47. 5 × 21. 7cm: Israfer），行間 1. 5cm，各面 30 ～ 31 行，紐孔（0. 5cm）は７ ～９ 行に直径4. 6cm（Israfer ～ 5cm : Geng）の円形がある．

筆跡：全体として色褪せてみえるが，地獄の章だけは墨あざやかに残る．各章の始まり１～３行は朱筆による．横書きとみえる．

丁付け：より小字で裏面の上側に書かれ，多く「序数，基数葉（*ptr*）」である．ただ地獄の章では表面に置かれた．ラウトは丁付け数値の書き方について，もっとも古い形は基数のみで，ついで序数が入れまじり，「序数 章（*ülüš*）基数葉（*ptr*）」に標準化されたと説く（Laut 1986, pp. 149-152）．ハミ写本は表面に標準型の丁付けである．

章だて：28 章からなる．序章（帰敬序）と 27 章で，各章の始まりには，三帰依文，つづいて物語の場所が指定される．終わりはやはり三帰依文があり，しばしば識語がある．ハミ写本は 25 章までで終わる（Geng 1980, p. 105）．

文字：ソグド起源のいわゆるウイグル文字，かなり多くのマニ教文献に似るが，大きいのが特徴である．平たく，より軟らかい書体はより古くみえる（cf. Hamilton 1958, pp. 441-442; Ş. Tekin 1980, I, p. 28）．ただ地獄の章は角ばった書体は新しいアシ筆のためであろうか，テキンは別写本に分類した．

文字の形について，ウイグル文字の s と š 及び同じく語末の q と γ は同化の傾向にあって，マニ教文献とごく一部の仏教写本に字形の基本的区別ないしその痕跡がある．センギム写本では s と š の区別書きをとどめる（cf. 小田 1987）．また語末の q と γ の字形はセンギム写本において同化したようにみえるが，この区別の指摘は従来気づかなかった新しい観点を与える（cf. 森安 1989, pp. 455-456）．

以上の外観から，センギム写本はこれまで知られる仏教写本のうちでは，古い部類にはいることが一致した見解である．ガバイン女史はそれを９世紀に入れ，ハミルトンは 10 世紀が妥当

とみ，テキンは８世紀論者である．

2．言語：トルコ語の名称と方言，借用語

2. 1.　名 称

普通にトルコ語といえば，国名にしたがって小アジア地域のトルコ共和国の言語を指すが，広義にはトルコ族諸国語をも総称する．歴史上，もっとも古い文献は突厥第二帝国(682-741: いまのモンゴル人民共和国) にさかのぼる．メンゲス(K.H. Menges)はオルホン・エニセイ碑文言語と古(古典)ウイグル語(トルファン～敦煌出土文献)とを古代トルコ語とし，東突厥系推定出自に入れた．南西アジア諸語(オグズ系言語)を西突厥系推定出自と仮定した(1968, p. 60)．古代トルコ語の範囲はガバイン女史の文法書に従ったが，古(古典)ウイグル語は現在の新疆ウイグル語に対比される名称である．この古ウイグル語がここで扱う，通常ウイグル語というものである．ただ，同時代文献では「トルコの言葉」ないし「トルコ語」(türk tili ～türkčä)と呼び慣らわしたようにみえる(cf. Hamilton 1958, p. 442)．この名称の由来が突厥帝国にあることを示唆する．初期仏教文献は西方トルコ(西突厥) 語の流入を思わせるから，トルコ語の名称はその実体を伴ったとみるガバイン説(Beiheft [I], p. 15)，名称の由来はそうだったとしても，言語はウイグル語と称すべきものという見解のハミルトン説(Hamilton 1958, p. 442)とがある．後者がウイグル語にこだわる理由は，上述メンゲスの分類とは異なり，ウイグル・オグズ同一語族説，すなわち南西アジアに展開したオグズ諸語はウイグル(トクズ・オグズ)連合の言語を基盤とする(Hamilton 1986, I, p. 182)と考えたからである．

2. 2. 言語の性質(論) ：正書法，文法形態など

ガバイン女史は，『古代トルコ語文法』(Gabain 1974)の序文において，「ウイグル(語)(uigurisch)」の名称は明確なものではなく，５種類くらいの方言的痕跡が確かめられるけれども，何ら民族的指標はつけられず，ただ実際上「ウイグル」であるにすぎないと述べる(op. cit., p. 1)．しかし文献言語の方言的要素について，テキストの性質に即して，y 方言，碑文言語(ルーン書体)，n 方言，ブラーフミー本の方言，キリスト教写本の特徴の五つに分けて解説した．y 方言は仏教写本の過半数，後期マニ教本と多くの非宗教的文書が基礎となる．碑文が言語上，方言的相違に従ってまったく一様であるのではなく，また n 方言は多くのマニ教的内容のものがこの方言的痕跡を示すと同様に，ルーン書体写本もそうである(op. cit., pp. 3-7)という．

n 方言とy 方言は碑文の*anyïγ (añïγ)* < 悪い> から写本の *anïγ* と *ayïγ* への派生を標識とし，テキストの言語特徴を分析した成果であった．プリツァク(O. Pritsak)とテキンはガバイン説を追認するとともに文献言語の方言的要素を n 方言と y 方言の二つの範疇に整理した(Pritsak 1963, pp. 27-30; Ş. Tekin 1976, pp. 146-150)．一方ハザイとツィーメは方言的要素の標識を，とくに n 方言的資料と目されるマニ教本から選び出して，ほとんどの場合に y 方言的標識も混在することを検証し，方言的条件を見直すことも課題であると述べた(Hazai･Zieme 1970, pp. 132-139)．庄垣内正弘は，結合母音の不記もマニ教本に頻出することに注目し，低母音化論を発表した(庄垣内 1982, pp . 39-57)．かくして，ラウトは n 方言的資料をñ テキストと定義し，言語・文法形態に加えて，いわゆるウイグル文字の正書法をも標識の対象に入れた(Laut 1986, p. 10)．

ラウトがセンギム写本によって検証したñ 指標は次のようである．
(A) 正書法と(B) 文法形態・文章論的特徴にわけて表示する(Laut 1986, pp. 59-75)．

(A) 1. 碑文の ñ をNY またはN で記す(y テキストはY)：写本は Y である．
2. 接尾辞がアレフ(ʾ)によって母音化される．＜ときに母音不記＞(y テキ

スト：四重変化）［数値は頻出度数］
(a) 属格: +N ’NK <+NNK> ［例］39 <14> (cf.239)
(b) 対格: + ’Q <+Q> /+ ’K [例]107 <17> (cf. 100); 後～前母音: 47～6
(c) 具格: + ’N <+N> [例] なし
(d) 所有1p. sg. : + ’M [例] なし
(e) 所有2 p . s g . : + ’N K [例] なし
(f) 所有1p. pl. : + ’M ’Z < + (’) MZ> [例] なし; (+YM ’Z : [例] 1)
(g) 所有2p. pl.: + ’NK ’Z [例] なし
(h) 命令法: - ’NK < -NK> [例] なし
(i) 名詞化名詞: + L ’Q < +LQ> [例] 74 <438> (cf. 173)
(j) 否定: +S ’Z < +SZ> [例] 2 <69> (cf. 133)
(k) 受身動詞化: - ’L <-L> [例] なし
(l) 動詞連用形: - ’P [例] なし
(m) 命令形1p. sg.: -(’)P ’N, -(’)YN> [例] なし
(n) 命令形1p. pl.: -(’)L ’M <-(’)LM> [例] なし
3 . 動詞的名詞の変則母音:
[例] *aγraγ ~ aγrïγ* ほか: 15 語
4 . 余剰アレフ(’) : [例] 11 語

(B) 1. 接尾辞+ D ’の奪格機能,
（稀に +D ’N): [例] 少数（なし）;
（cf. +DYN: 多数）
2. 名詞的動詞（連体形）: -QM ’/ -KM ’が支配的,（まれに- ’QLY / -KLY）:
[例] 2 語（ごくまれ）
3. 動詞連用形: - ’P の拡大形: -P ’N ; -P ’NYN [例] 4 語

ハザイとツィーメによれば，一，二のマニ教本において上表（A - 1）（B - 1）の標識は n 方言的特徴を示す．またラウトが対照した『八陽経 』敦煌（ロンドン）本も同様である．ラウトはこのセンギム本の ’混成形態 ’を，現存写本が作品原本から相当の修正を経たものとみた（Laut 1968, p. 61）．ハミ本はほとんど y 方言的テキストに変化したのである．

2 . 3 . 借用語：ソグド語とトカラ語

ガバイン女史は，ベルリン所蔵本の刊行にあたって，借用語の大部分はサンスクリットの変形であり，雑種（hybrid）のサンスクリット，またはサカ語を通じて転訛したか，あるいは大部分トカラ語の仲介によったことを指摘した（Beiheft [I], p. 15）．サンスクリット変形語のソグド語とトカラ語の仲介については，テキンの索引に不十分ながらとり挙げられ（Tekin 1980, 2. pp. 9-148），そのトカラ語仲介形式の誤りがトーマスによって指摘され修正された（W. Thomas 1983, pp. 238-239）が，ラウトの抽出（Laut 1986, pp. 89-148）には，庄垣内の語末形式論（ 庄垣内 1978） にも負うところが大きかったと思われる．ともかく，ラウトによってセンギム本のサンスクリット変形の統計的数値が示された．

ｻﾝｽｸﾘｯﾄ変形	Skt.	ﾄｶﾗ語	ｿｸﾞﾄﾞ語	その他
ｾﾝｷﾞﾑ写本	380	273	65	42
(%)	100%	71.8%	17.1%	11.1%

ラウトはセンギム本のソグド語形からハミ本のトカラ語形への変化の例証を試み，ソグド語形の頻度がより高い原本を想定せしめた．

3. 訳経：識語と原典

3. 1. 識　語

訳経の情報は，テキストの識語にあり，テキンの翻訳では次のように読まれた．

> 内側の仏法を，外側の18（の）学問・諸論を識別・理解したアグニデシャ国に生まれたアーリヤチャンドラ菩薩師匠がインド語からTWXR Y 語に翻案した．イル・バリクに生まれたプラジュニャーラクシタ師匠がTWXRY 語からトルコ語に翻訳した．
> （Tekin 1980, 1. p. 214 : 87v1 - 8）

この識語に関して最初の見解を発表したミュラーは，アグニデシャをナガラデシャ（Nakridiš< Nagaradeśa ～ Skt. Nagarakāra ; 那掲羅掲国）と読み，いまのアフガニスタンの東北部ジャラーラーバード付近にあてた．TWXRY はトカラ（toxrï < Tukhāra : 覩貨羅国），イル・

バリクはイリ渓谷のどこか，モンゴル時代の都市イリバリク（いまのクルジャ）と理解した（Müller 1916, pp. 416-417）．これによって，原典の言語は「トカラ語」と命名された．ショルチュク（Šorčuq: いまのカラシャフル付近）で発見された「トカラ語」の『マイトレヤとの邂逅』戯曲（Maitreyasamiti-nāṭaka）の断片と対比させて学界に大きな寄与をなした．しかし原典作者の出生地，Nakridiš は正確な読みではなく，ヘンニング（W. B. Henning）によって正しくアグニ国（Agnidiš < Agnideśa : 阿耆尼国）と読まれ，いまのカラシャフル地方に当てられるに至った（Henning 1949, pp. 158-162）．また，イル・バリクはトルコ語で「国都」のいいだとし，ハミルトンはコーチョ（高昌）の可能性を示唆した（Hamilton 1958, p. 443）．トカラ語（A）に替えて，議論の余地のないアグニ語と呼ぶべきだ（Demiéville 1958, p. 435）との見解もあるが，このブラーフミー文字のインド・ヨーロッパ語族のアグニ語とクチャ語は，ミュラーの命名を保持してトカラ語（A, B）で呼び慣わしている．

3.2. 原　典

原典と目されたトカラ語（A）の『マイトレヤとの邂逅』戯曲に，トルコ語の平行箇所はよく一致する（Beiheft II, p. 14）ものの，トルコ語本は戯曲として特徴づけられるものではない（op. cit., p. 15）．ラウトは「トルコ語本はたいへん自由な翻訳であり，一種の改作（翻案）だ」（Laut 1986, p. 15）というに対して，トカラ語学者のトーマスは少し性急すぎる理解だと評した（Thomas 1986, p. 278）．ともかく，ショルチュク出土のトカラ語（A）原典とも目される写本断片にアーリヤチャンドラ作であること（Müller 1916, p. 415, cf. Thomas 1983, p. 236）が記されたほか，写本断片に，トルコ名の寄進者が名前を連ねるという（Beiheft [I], p. 20; II, p. 14）．

トルコ語訳者のプラジュニャーラクシタ（Pratanyarakšit< Skt. Prajñārakṣita）の出生地，イル・バリク（国都）が果たしてコーチョでありうるかどうかは，翻訳の時期とも関係して議論の余地があるはずである．この訳者は識語にはkarmavažiki(~Skt. karmavācaka, Geng 1988, I. p. 113），すなわち業論説師とだけ称されたが，原典作者と同じく小乗派の毘婆沙師（vaibhāṣika）の流れを汲む者と解される（Beiheft [I], p. 21; II, p. 14）．ガバイン女史はトカラ的称号を帯びたトルコ族出身者とみた（Beiheft [I], p. 20）が，森安はトカラ人であっても何ら問題ないとみる（森安 1985, p. 55, n. 120）．このトルコ語名の形がソグド語仲介形式という議論（Laut 1986, pp. 106-107）もあることから検討課題である．

4. 写経：写本と施主

4.1. センギム写本

センギム写本の施主は，優婆塞ボズ・バイ・ティレク（Boz bay tirāk）と夫人（？: 優婆夷）イドレグ（Yidläg）といい（Gabain 1957, Taf. 5v27; 1961, Taf. 118v22, 27; 1957, Taf. 2v27），「わ（れら）が兄」のシンタル・シェリ（Šïntar šäli）に書写を請い（Gabain 1957, Taf. 1r11），また実際にダルマヴィーラ（D(a)rmavir ~ Skt. dharmavīra, cf. Laut 1986, p. 107）という書写人の名がみえる（Gabain 1957, Taf. 127v29）．その功徳により，「幸ある高昌国の霊」にも神助を仰ぎ（Gabain 1957, Taf. 1v11），また「われらが母」のキュン・シリグ公主（Kün Silig Qunčuy）の長寿を願う（Gabain 1957, Taf. 1v7/8; 1961b, Taf. 200 v9）．この写本は他の土地から高昌国（Turfan）へ持って来たものではない（Beiheft [I], p. 27; Hamilton 1958, pp. 441-442）．

4.2. ムルトゥク写本

ムルトゥクの寺院跡から出土した写本断片の一つに次の識語がある（Gabain 1957, Taf. 219 = TIIIM 123B; cf. Beiheft [I], p. 29; cf. Zieme 1981, p. 90）．

> ある［未解読］僧院に聖カルヤーナバドラ（？）（Klanbatri ~ Skt. Kalyāṇabhadra(?)）師匠を始めとする 40 人のシェリ（šäli）が安居にめされ

> たとき，私ヴァプツィン（Vaptsïn）（と？）シンカイ・カヤ（Sinqay qya）は，優婆塞マングチョル（Mangčor）（と）優婆夷トグミシュ（Toγmïš）の願によって，この経典をわれらは書き奉った．

テキンがこの写本を８世紀においた誤解（Tekin 1980, 1. p. 9; cf. 森安 1985, p. 55, n. 120; Laut 1986, p. 59, n. 8）はすでに述べるまでもない．ここで注意を引くのは「安居」の時節に書いたことである．

4. 3.　ハミ写本

ハミ写本の施主は，タシュ・エゲン都督（Taš ygän tutuq）と夫人トズン（Tözün）である．残葉にみえる書写人は，ヴァプツン・シェリ（Vaptsun šäli）とトゥ・ツァパ姉（Tu tsapa äkä）の二人であるが，耿世民の調査によれば，三種の筆跡に分かれる．この写本に施主の敬序が添えられた（Geng-Klimkeit 1988, pp. 10-13）ことは，書写年代を推定する大きな手がかりを与える．ドルクン（K. Dolukun: 多魯坤）ほかの序章研究（新疆文物 1985, p. 61）において「羊歳閏三月二十二日」と解読された日付について，いち早く中国暦に従い，A. D. 1067 年に，森安は比定した（森安 1989, p. 473）．書写日付の確定は，敬序の主君と一族に対する表敬文の理解を深めるに違いない．

> さらにまたこの功徳を，最初に回向する．われらは，天の英知ある国の知恵者たる獅子，われらの天ウイグル・テルケン様へ，賛えあるオン・ウイグル国，三十王子，九大臣，千官僚，万内侍・従者とともに千万年まで国が繁栄せられることとなれよ（cf. Dolukun 1985, 1. p. 61; Geng-Klimkeit 1988, I. pp. 10-13 (Ka 21-27); Israfer 1988, p. 18, 114）．

この回向文において，ハン（カガン）ではなく，テルケン（tärkän）の称号およびオン・ウイグル（ on uiγur : 十姓回鶻）の解釈に新しい課題を提供する（cf. Zieme 1975, p. 49 (436), 53(484), 64(665); Zieme 1985, p. 189(59.3)）．ガバイン女史が翻訳者自身の書き下し文に違いないとみた，序章に関して，ハミ写本はベルリン所蔵本を補足することができる．「四キュセン」（Küsän ~ Kuč : 亀茲; 庫車）国の三人の先師についで，「三スルミ」（Sulmi）国の三先師の最後にみえるアーリヤチャンドラ師（Aryačantri ačari）を，トカラ語作者とみなした耿世民は，これまで地理的位置付け不明のスルミ国をアグニ国のトルコ的名称にあてた（耿世民・張広達 1980, pp. 147-159）．

5．宗教の混成

5. 1. 小乗・大乗仏教

ガバイン女史は，トカラ語作者アーリヤチャンドラは説一切有部（Sarvāstivādin）の毘婆沙師（vaibhāṣika : 註釈家）に所属したとみる（Beiheft [I], p. 21）．トルコ語本の識語では，たいへん称賛し，「毘婆沙論の甘露を吸い込んだ」（Gabain 1957, Taf. 177v20; cf. Tekin 1980, 1. p. 188），「論理文法学（tarka vyākaraṇa）などの諸論を識別・理解した毘婆沙師」（Gabain 1957, Taf. 38v22-24）と賛え，菩薩とも称した．「作者・訳者・書写人は，小乗派に結び付くように思われるが，テキストは大乗的要素を持つ．これはスコラ哲学者と国民的信仰との間において理解されなければならない」（Beiheft [I], p. 21）．また在俗者は「未来仏との遭遇を期待するが，それによって救済されるのではなく，その教えを聴いて，それによって認識を得て，自ら解放に至るのである．このテキストの理想的人間像は菩薩ではなく，阿羅漢なのである」（op. cit., p. 31）．序章には阿羅漢果の達成が解説されてあり，ときどき写本施主（書写人ではない）の名前が挿入された．センギム本とハミ本では施主名は入れ替わった．ドゥミエヴィルは「大乗的要素はホータン語本ではもっと少ない．アグニ原本の作者と訳者も毘婆沙師，すなわち説一切有部ではなかったのでは」（Demiéville 1958, p. 436）という．また作者は「その戯曲（nāṭaka）編集のために，サンスクリット詩から霊感を得たわけでもなかろう．中央アジアの物語作者や詩人は，実際に知られた，いずれのものも，中国・インド本には正確

に一致しない．インド起源の材料のうえに粉飾することが自由であったようにみえる」(op. cit., p. 439)ともいう．信仰告白について，ガバイン女史は「論理的に考えると，懺悔は何も聖職者に限定されるものでもあるまい．中央アジアにおける仏教の，マニ教的在俗者の懺悔への歴史的関係は，もちろんまだ一つの課題である．地獄の章はおそらく一つの型にはまった教唆であると同時にまさに在俗者の懺悔への手引きでもある」(Beiheft [I], p. 26)と解説する．ともかく宗教思想史の問題は，テキストの綿密な比較研究に委ねなければならない．

5. 2.　マニ教

ただ最近マニ教の仏教的混成（シンクレティズム)ないし仏教本のなかのマニ教的要素がクリムカイト氏の研究によって関心を引くようになった(cf. 森安 1989, p. 470)．確かなことは写本の段階で論じられるべきことである．ハミ本の「いまや，われらにも光明使が来た」(Geng-Klimkeit 1988, p. 138 (1756-1757); cf. 森安 1989, p. 470) は，残念ながらセンギム本の欠損箇所であるが，光明使(*yaruq yaltrïqlaγ yalawači*〜mp . frêstag rōšn)はマニ教用語と対応する．

5. 3.　「新日の祭」

最後に触れておかねばならないことは「新日の祭」説である(Beiheft [I], pp. 29-30)．私の読む限りでは，マイトレヤの「顔見世の新日」(*körünč yangï kün*)は物語の本文のなかのできごとのようにみえる．識語のなかにも「顔見世〜絵芝居(？)」(*körünč*)の語がみえる，とあり(Beiheft [I], p. 29)，そうならば，ドゥミエヴィルは中国の変相に対比され，台本は変文にあたると述べた(Demiéville 1958, pp. 435-436)が，私には確認できない．たとえば，「僧たちは仏陀に申し上げた：『尊者，わが天(神)よ．マイトレヤの新日の･･･[写本欠損]･･･賞賛したもうた．』 かくしてまた，ますます，その切望するよき顔見世が新日とともに来たるべく，僧たちは願望していた」(Gabain 1961, Taf. 133v14; Geng-Klimkeit 1988, p. 272 (3692-3698))とある．マイトレヤ菩薩が未来仏として待望される「新日の祭」があって，公衆の前で，おそらく楽器の伴奏によって作品が朗読され，あるいは絵芝居が行われた，と推測されたのである．ガバイン女史は，新年の満月(夜)に仏陀の伝記が上演されたチベットのラサ(19 世紀)の例と対比したのである．この祭には作品の写本が必要であったとする(Beiheft [I], pp. 29-30)．

最近刊(1988)のハミ本『マイトレヤとの邂逅』の序文において，耿世民・クリムカイトは次のように解説する(Geng 1988, p. 7)．

ミュラー(F. W. K. Müller)が Skt. pratipad と説明した「新日」は半月の初日であり，また新しい満月の日であるとされる．そして「複数の新日」のもとに「pravāraṇā 新日」は一つの特別な地位に受け入れられるが，マイトレヤ祭が祝われた「新日」は，年中行事となったことが容認される．この祭は新年祭とも合同したが，異端に対して仏教的教えが勝利したことを祝った(Beiheft [I], p. 29)かどうかは，われわれには未解決とせねばならない．ともかくクチャにおいて新年祭はイラン的伝統に関連して祝われたのである．劉茂才はこう書いた．「新年祭には七日間にわたり家畜の闘争技が催された．･･･ そのほかに昼夜にわたり蘇莫遮(Su-mo-tschê)と名付ける芝居が上演された．そのかたわら動物仮面を役者がつけて歌い，踊った．蘇莫遮はイラン的ナウルーズ(正月祭)，雨乞術と比較される．･･･ このように，クチャもイラン的影響のもとにあった」(Liu Mau-tsai 1969, p. 10, 170, 171)と．注目すべきことは，中央アジアのマニ教徒も「新日」すなわち「大新日」を祝った．それはツィーメによって刊行された断片に出典する(Zieme 1975, p. 49, 50, n. 438)．テキストは，マニ教徒の王が宮廷の貴人たちと祝祭に加わったことを知らせるのみで，この日がどのような機能を果たしたかは，明らかでないという．

以上の耿世民・クリムカイト両氏の見解は，私にはどうもイラン的影響を強調しすぎるようにみえる．仮に新日の祭が「マイトレヤ祭」であったとしても，ただちに新年祭に結び付くか

どうか，納得しがたい．上記ツィーメ刊行物から引用した「pravāraṇā 新日」は仏教的写本であるが，「諸新日のなかで最勝，最優先のものである」(Zieme 1975, p. 50: T III MQ 62)とあり，この方が注目すべきことのようにみえる．この新日は「自恣」の日，すなわち仏教教団の夏安居の解制日にあたり，旧暦８月15日(または７月15 日)である(cf. 玄奘: 大唐西域記 p. 59, 275)．ハミ本序章には，仏教的故事を引用して「あるときにマハーセーナと名付ける富豪夫人は，三か月の正安居する僧衆へあらゆる不足ない供養をしようと至った」(Geng-Klimkeit 1988, p. 22 (154-157))とある．上述ムルトゥク写本は安居の時節に書写されたことが識語に書かれたことを，すでにみた．「新日の祭」については不確かなことがまだ多いのである．

6．　結びにかえて

以上，初期トルコ語仏典『マイトレヤとの邂逅』写本の発見，外観，文字と言語，借用語，原典と写本の性質，宗教の混成と実際的展開についてこれまでの研究の概略を述べた．

総括して，課題の年代論は，ハミ写本を含めると，８世紀から 11 世紀に及び，偶然にもセンギム写本の発見者であるルコックが認定した取得地の遺跡年代と同じ広がりを持つ．しかしながら，ハミ写本の書写日付(1067) が妥当であり，センギム写本については９世紀か，10 世紀かの異論があっても，現存写本が西ウイグル国時代に属することは疑いない．そしてトルファン・ハミ地方が写本の舞台だったということである．しかしながら，その翻訳時期にさかのぼると，識語によれば，原本の成立はカラシャフル地方である可能性が高いことを考慮しなければなるまい．

同時代にトルコ語と呼ばれた言語が，どのように言語史のうえで位置づけられるかは，なお多くの検証が必要であろう．ガバイン女史の西トルコ流入説に対して，コーチョ(高昌: トルファン)よりもさらに，西方的性格の期待されない敦煌の写本と同様な特徴を，西方トルコの影響と考える理由はない，とハミルトンは評した(Hamilton 1958, pp. 442-443)．ガバイン女史は「批評に対する原則論」と題して，トルコ語の高昌国は，ウイグル草原帝国の崩壊後に成立したものとして，このカタストロフによってトルファン盆地へ避難したのは，ウイグル族でないトルコ族もあるとみてよい．トルギシュやバスミル族も住みついたはずだ．このトルコ族が国の支配権を行使した，と誤っていうのではない．９世紀のなかばの国家状態はまだ明らかではないのである．言語的変則はこれが非ウイグル族に由来したようにみえるのは，カーシュガリーの方言資料(11 世紀)と比較してのことである(Beiheft II, p. 10)という．ハミルトンはその後(1986)敦煌写本の総合的研究の成果を発表した．カラハン朝領域や，のちのオスマン朝帝国にいたるオグズ方言の語彙を敦煌写本にまでさかのぼらせたのである．ある時期の言語的共通性をウイグル連合(トクズ・オグズ)に見い出した(Hamilton 1986, pp. 180-181)．以上の議論から，初期仏典のトルコ語がいかなるトルコ系語族に属するか，の課題が提起される．

次にわれわれのもっとも高い関心は，ソグド人ないしソグド系トルコ人の関与である．初期トルコ語仏典の出現をいかなる文化史的枠組みにおいて把握するか，の問題にかかわる．ここで最初に触れたラウト(1986)と森安(1989)の論述について紹介し結びにかえる．

ラウトの「ソグド仮説」を支える論拠の一つは，『マイトレヤとの邂逅』のセンギム写本とハミ写本の比較から導き出されたソグド的要素の分析結果であるに違いない．「ソグド語形の頻度がより高い原本を想定した」(第２章第３節参照)からであろう．原本の成立を８世紀頃におき(Laut 1986, p. 163)，ソグド仏教の影響下にトルコ仏教がその揺藍期を迎えた，とみる．これに対して森安説では，「トルコ語仏教文献はトルコ＝マニ教文献の圧倒的影響のもとに初めて出現した」(森安 1989, p. 472)とし，「どんなに早くても9 世紀前半であり，本格的になるのは９世紀後半～ 10 世紀ということになろう」(森安 1989, p. 472)と判断する．この年代観はウイグル族の移住後にトカラ仏教のウイグル化(トルコ語化)によって本格的になったという歴史学

的立場にもとづくようにみえる．確かにラウトの８世紀説は史料的裏付けに乏しい．草原ウイグル帝国におけるマニ教の国教化(763)とトルコ語マニ教文献の出現は無関係ではあるまい．トルコ語マニ教文献の流布が先行したとみる森安見解は正鵠を得ていると思われる．それを手本にして，地域によってトルコ語仏典やイスラム的トルコ語作品の連鎖的出現を促したに違いない．しかしながら，ソグド仏教的要素がどのようにトルコ仏教のなかに繰り込まれたか，の課題はさらに追求されなければならない．

引用・参考文献

Robert Dankoff, James Kelly 1982: *Mahmud al-Kāšγarī, Compendium of the Turkic Dialects*. I., Sources of Oriental Languages and Literatures 7, 416p., Harvard University Printing Office.

多魯坤（Dolukun, Kambar）, 斯拉菲爾（Israfer, Y.）1985 : 回鶻文＜弥勒会見記＞序章研究 , 『新疆文物』1985-1, pp. 58-94. （Urumuchi）

馮家昇（Feng Jiasheng）1962: 1959 年 哈密新発現的回鶻文仏経 , 『文物』1962-7, 8 . pp. 90-97.

A. von Gabain, H. Scheel 1957: *Maitrisimit* [I], Beiheft [I], 9p., Wiesbaden.

P. Demiéville, J. R. Hamilton 1958:(review), *TP* 46, pp. 433-445.

A. von Gabain, R. Hartmann 1961: *Maitrisimit* II, Beiheft II, 69p., Berlin.

A. von Gabain 1974: *Alttürkische Grammatik*, 3 Auflage, 398p., Wiesbaden.

Geng Shimin（耿世民） 1980: Qädimqi uygurcä iptidayi drama piyesasi “Maitrisimit” (Hami nushasi)-ning 2pärdäsi häqqidiki tätqiqat. *JTS* 4, pp. 101-156. (Harvard University).

耿世民・張広達 1980: 唆里迷考 , 『歴史研究』1980-2, pp. 147-159.

Geng Shimin, H.-J. Klimkeit 1985: Das 16. Kapitel der Hami-Vesion der Maitrisimit. *JTS* 9, pp. 71-132.

Geng Shimin, H.-J. Klimkeit, J. P. Laut 1987: Der Herabstieg des Bodhisattva Maitreya vom Tuṣta-Götterland zur Erde. Das 10. Kapitel der Hami-Handschrift der Maitrisimit. *AoF* 14-2, pp. 350-376.

Geng Shimin, H.-J. Klimkeit 1988: *Das Zusammentreffen mit Maitreya. Die ersten fünf Kapitel der Hami-Version der Maitrisimit.* In Zusammenarbeit mit Helmut und Jens Peter Laut. Teil I, 333p.; II, 120p., Wiesbaden.

Geng Shimin, H.-J. Klimkeit, J. P. Laut 1988: Das Erscheinen des Bodhisattva. das 11. Kapitel der Hami-Handschrift der Maitrisimit. *AoF* 15-2, pp. 315-366, Berlin.

James Hamilton 1986: *Manuscrits ouïgours du XI^{e}-X^{e} siècle de Touen-Houang* I, II. 1: pp. 1-206, 2: pp. 207-350, Paris.

Georg Hazai, Peter Zieme 1970: Zu einigen Fragen der Bearbeitung türkischer Sprachdenbkmäler. *AO* 32, pp. 125-140, Kopenhagen.

W. B. Henning 1949: The Name of the <Tokharien> Language. *AM. NS* 1-2, pp. 158-162.

Israfer Yusuf（伊斯拉菲爾・玉素甫）1988：(Dolukun K., Abdu Kayum H.) 『回鶻文弥勒会見記』(維吾爾文) [１] 221+176+12p., 烏魯木斉.

Jens Peter Laut 1986: *Der frühe türkische Buddhismus und seine literarischen Denkmäler*. (VSUA 21), 228p., Wiesbaden.

W. Thomas 1986:(reviuw), *UAJ.NF* 6, pp. 274-279.

李経緯（Li Jingwei）1982:「哈密本回鶻文《彌勒三彌底経》第二巻研究」『民族語文研究文集』pp. 673-704. 青海民族出版 .

李経緯（Li Jingwei）1983:「哈密本回鶻文《弥勒三弥底経》第三巻研究」『中亜学刊』第一輯, pp. 180-211.

Liu Mau-tsai（劉茂才）1969: *Kutscha und seine Beziehungen zu China vom 2. Jh. v. bis zum 6. Jh. n. Chr.* I, II. 1: Texte, viii+200p.; 2: Anmerkungen, Anhänge, Index, 200-305p., Wiesbaden.

Karl H. Menges 1968: *The Turkic Languages and Peoples. An Introduction to Turkic Studies*. 248p., (Ural-Altaische Bibliothek), Wiesbaden.

水谷真成（訳）1972 : 玄奘（著）『大唐西域記』（中国古典文学大系 22）463p., 平凡社.

森安孝夫 1985:「チベット文字で書かれたウイグル文仏教教理問答（p.t. 1292）の研究」『大阪大学文学部紀要』25, pp. 1-85.

Takao Moriyasu（森安孝夫）1988: L’origine de bouddhisme chez les turcs et l’apparition des textes bouddhique en turc ancien. *CF-J’88*, pp. 215-237, Kyoto.

森安孝夫 1989:「トルコ仏教の源流と古トルコ語仏典の出現」『史学雑誌』98-4, pp. 453-487.

F.W. K. Müller, E. Sieg 1916: Maitrisimit und “Tocharisch”, *SPAW* 1916, pp. 395-417.

小田壽典 1988:「ウイグル文八陽経写本の S / Š 字形に関する覚書」『豊橋短期大学研究紀要』５, pp. 21-32.

Omeljan Pritsak 1963: Das Alttürkische. *Handbuch der Orientalistik,* 1-5-1, pp. 27-52, Leiden/Köln, E. J. Brill.

庄垣内正弘 1978 :「‘古代ウイグル語’におけるインド来源借用語彙の導入経路について」『アシア・アフリカ言語文化研究』15, pp. 79-110, 東京外国語大学 .

庄垣内正弘 1982 :「古代トルコ語ｎ方言における i / ï の低母音化について」『神戸市外国語大学論叢』33-3, pp. 39-57.

Şinasi Tekin 1976: Eski Türkçä. *Türk Dünyası El Kitabı*, pp. 142-192, Ankara (TKAE 45-I-A5).

Şinasi Tekin 1980: *Maitrisimit nom bitig*. Berliner Turfantexte 9, 2 vols, 264p., 187p.

Werner Thomas 1983: (review), *UAJ.NF* 3, pp. 233-240.

Peter Zieme 1975: *Manichäisch-türkische Texte.* BTT 5, 90p.

Peter Zieme 1981: Materialien zum uigurischen Onomasticon, II. *TDAYB’78-79*,pp. 81-94.

Peter Zieme 1985: *Buddhistische Stabreimdichtungen der Uiguren*. BTT 13, 247p.